

歴史動画外交史②

関連サイト

朝鮮通信使

http://v.youku.com/v_show/id_XMjM3NDY0NjQ0.html

青木昆陽

<http://www.youtube.com/watch?v=OLHXhse50n4>

シーボルト

<http://www.youtube.com/watch?v=kHOWgQAWkhw>

アヘン戦争

<http://www.youtube.com/watch?v=UvFGoChU0u4>

横浜港

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09830/v098270000000541190/>

適塾

http://www.youtube.com/watch?v=tac1_-7GM1o

鹿鳴館（劇団四季）

<http://www.youtube.com/watch?v=Kvvn9U0BHbY>

下関条約

<http://www.youtube.com/watch?v=kQzrLtIMkX4&feature=fvst>

田中義一

<http://www.youtube.com/watch?v=hFtZqLzfaS0&feature=related>

李香蘭（満州国）

<http://www.veoh.com/watch/v142370422t8Kwxjk>

近衛文麿

<http://www.youtube.com/watch?v=74h-Pvya10w&feature=related>

東条英機

<http://www.youtube.com/watch?v=Wp8BdrRzPHw&feature=related>

沖繩戦

<http://www.youtube.com/watch?v=zh-TXoeK1xM&feature=related>

吉田茂

<http://www.youtube.com/watch?v=DDEuMQXJG6E>

東京裁判

<http://www.youtube.com/watch?v=grFZiNaNVds&feature=related>

鳩山一郎

<http://www.youtube.com/watch?v=gV37CSevy6Q&feature=related>

高田の独り言

雨森芳洲と朝鮮通信使

中国語と朝鮮語をやってきた私は、江戸時代に長崎で唐話（中国語）を、釜山で朝鮮語を身につけた雨森芳洲という存在を思慕してやみません。なぜ鎖国時代に釜山に滞在できたかといいますと、実は鎖国の時代とはいえ、抜け道はいくつかあり、対馬藩だけは朝鮮に倭館という「リトル・ツシマ」を形成して居住してもよかったです。現在釜山駅の駅前大通りをこえたら、「上海通り」というチャイナタウンとロシアタウンとが混ざり合った外国人街があるのですが、その一角（草梁洞）に倭館があったのです。釜山に行くたびにそこを訪れる私ですが、彼を意識して中華料理屋で中国語、外では韓国語を話して「21世紀の雨森芳洲」を気取ります。

彼の一世代の大仕事は朝鮮通信使の接待です。その際は日本各地の人たちがたいそう歓迎し、学問的先進国の朝鮮人使節に教えを請うたり、また朝鮮の芸能人を追いかけたりと、「韓流」はそのころにもあったようです。

通信使の跡を追って、東京から京都まで青春18きっぷを買って二日かけて歩き回ったことがあります。浅草の河童橋にある東本願寺は、通信使が宿泊所としたところである。また、静岡市には清見寺という寺がありますが、この寺は通信使が何度も利用した場所で、彼らの残した扁額がこれでもかというほどかかかっている。特に静岡県民と韓国語コースの方には行っていただきたいところです。

滋賀県北東部の高月町というところは雨森芳洲の故郷です。今は雨森芳洲庵という記

念館が建っていて、彼を顕彰しています。さらには彼を祭った神社まで建てられていて、地元の人からは今も親しまれています。地元の学校では、「朝鮮通信使かるた」なるものまであり、郷土の先人の偉業をたたえる心も並大抵ではありません。滋賀県の彦根の夢京橋キャスルロードという通りには宗安寺という寺があり、ここも通信使が泊まったところでやはり彼らの残した扁額や、彼らが見たであろう庭が残っています。同じく滋賀県の近江八幡市には、その名もなんと彼ら専用の道路、「朝鮮人街道」と彫られた石碑があります。さらに京都の寺町には信長の死んだところとして名高い本能寺があるのですが、その入口にはここも通信使の滞在した跡が石碑と説明板に残されています。

本州最西端の町、山口県下関市の関門海峡には「朝鮮通信使上陸淹留之地記念碑」という石碑が建てられ、さらには地域振興の一環で通信使を再現した行列も行っています。そしてそれらを外交官として取り仕切った人物こそ芳洲さんなのです。それにしても、中国語と朝鮮語で飯を食べていたこのじいさんは、300年後の同業者（？）の高田にとって生涯の目標でもあります。

「皮相」で「悲愴」な西洋文明導入

「大政奉還」と「版籍奉還」から始まる明治維新について調べると、この国に昔から連綿と伝わる「公地公民」すなわち全ての土地と人民が天皇のものであると再確認するという形式的な作業から始まったことに着目せざるを得ません。天皇中心の時代がそれ以前にはいつだったか思い出してくだ

さい。後醍醐天皇による建武の新政を除いては、平安時代初期にまでさかのぼるのです。実に千年の時をこえて政権をタイムスリップさせたのです。

しかしそれと同時に、お雇い外国人を教師として大臣並みの破格の待遇で雇い、西洋文明の移植に精をあげます。ただ、中国などにしても西洋の技術を学んだ時期はありました。しかし日本は技術のみならず、強制されてもいないのに洋館のベッドに寝て、フォークやスプーンで肉食を食べ、洋装をして洋風のダンスをするなど、衣食住という生活様式の根本まで取り入れるくらい徹底していたのです。こんなことを世界で初めてしたのは日本人なのです。特に食文化を変えるのは生理的に抵抗があったのではと思います。

現在日本人の家にはだいたいナイフやフォークがあり、コーヒーカップやティーカップのセットがあり、朝からパンとコーヒーだったりしますが、中国や韓国ではあまり見られない光景です。このように洋風に慣れ過ぎた今の我々からすると、当時の人々の生理的な違和感が想像しにくいでしょうが、今の日本人にとってイスラム教徒圏の生活様式を政府が取り入れて推進したような感じでしょうか。この違和感をたとえるならば、トルコ料理レストランに行くようなものでしょう。看板の文字はアラビア文字で右から左に書き、じゅうたんの上にあぐらをかいて坐り、現地の民族の服装を着て、羊肉やナン、シナモンのはいった紅茶やケーキなどをどっさりいただき、トルコのベリーダンスをおどるといった感じです。明治時代の日本のエリートたちは、こんな感じで違和感あふれる異文化の衣食住を生

理的に自分のものにしたのではないかと思います。

ところでサン・テグジュペリの童話「星の王子様」に興味深いエピソードがあります。明治期のころだとおもいますが、トルコの天文学者が星をみつけて欧州の学会に発表したけれど、そのときトルコの服装で発表したら欧州の学者から星の発見を無視された。しかしトルコで服装の「改革」が行われ、洋服を着て再び発表したら、そのトルコ人学者の意見がようやく認められた、というような内容です。

江戸東京博物館に復元されている鹿鳴館の様子、すなわち屋内で洋装した男女がくるくる回りながらおどる風景を見ました。

鹿鳴館の模型をみて欧州文化の「皮相な」真似だとしか思っていないでしたが、「星の王子様」のこのくだりを読んだら、生理的なものまで欧米式にせざるを得ない当時のアジア人の「悲愴な」思いが込められているのだと気付きました。

ちなみに今の中国人はこのような欧米文明との精神的格闘をどれだけしているのでしょうか。今でも巨大な工場を残す群馬の富岡製糸場は官営模範工場として造られたのですが、それをモデルとして日本中に製糸場ができ、軽工業製品の輸出に成功しました。その殖産興業のやりかたは、1980年代の改革開放政策で経済特区に外国企業を呼び、中国人労働者に欧米や日本の技術を学ばせた結果、今や世界の工場になっていることと似ています。欧米文明と同時に入ってきた欧米文化に対し、中国人が自らをどのように変え、逆に自分たちの文化をどのように守ってきたかが興味あるところです。高田の独り言

満州の居心地の悪さ

私が満州に興味を持ったのは、高校三年生だった1989年にフジテレビで放映されたドラマ「さよなら李香蘭」を見てからだと思います。日本人が描く満州は、せつなく懐かしく甘酸っぱく、悲惨で苦々しく恥ずかしく欺瞞的な・・・、あらゆる相矛盾した形容詞を無造作に並べ尽くしたかのような感があるとその時から感じ、言いようのない思いを感じたものです。そしてそれは、そのドラマのもう一つの舞台である上海に対しても感じたものですが、それとはまた別の魅力があるのです。

私が初めて山海関をこえて満州に入ったのは、それから5年後、大学を卒業した直後でした。北京駅を出発した汽車は、「李香蘭」でみた、だだっ広い大地の朝もやの中を、瀋陽、長春、吉林と駆け抜け、三日目に朝鮮との国境の町、延辺にたどり着きました。初めて満州の土を踏んだのは、満州時代に建てられた延吉駅でしたが、想像通りの乾いた朝の空気と、石炭や弁当の匂いが立ち込めていました。

留学先に延辺を選んだのは色々な理由がありますが、そのうちの一つに朝鮮族の存在があります。そもそも東北に今なお百万人以上の朝鮮族が定住しているのも、日本の植民地となった朝鮮の民衆が農地を求めて中朝国境の豆満江を越え、満州に移ったからです。そんな意味でも延辺ではまだ「満州」が生きていたのです。そして延辺大学留学時代にも、多くの満州時代を知る老人たちと中国語や朝鮮語、そして半世紀ぶりの日本語で当時のことについて語ったものです。

放浪の旅にも何度か行きました。ロシア革

命後に社会主義革命から逃れたロシア人が移住したハルビンは、当時キタイスカヤ通りといわれたロシア建築が建ち並ぶエキゾチックな街並みが残っていました。伊藤博文が安重根に暗殺垂れたのも哈爾濱駅構内で、現在は記念館になっています。

また、ハルビン郊外の平房というところにバスを乗り継いで行ったのですが、そこは関東軍による人体実験でしられる731部隊の記念館がありましたが、「日本人がこんなに悪いことをした」という展示内容を見て、罪悪感にさいなまれるのもつかの間、売店でおじさんたちがあれこれと売りつけようとする商魂たくましさを見せつけられて、罪悪感がしぼんだことを告白します。また満州国時代当時奉天と呼ばれていた最大の都市、瀋陽の郊外で918事変、すなわち満州事変がおこりました。9月18日というのは中国人なら「国恥記念日」として誰でも知っている日で、瀋陽の郊外には巨大な博物館が建っています。さらに鉄道とバスを乗り継いだ撫順という小都市は、李香蘭が育った町でもあり、また彼女が幼少の頃みた、平頂山虐殺の場所でもあります。今なお体育館のような建物の中に、数百体の白骨がころがっているのです。こんなショッキングな光景は後にも先にも見たことはありませんでした。さらにこの町は満州国崩壊後に日本人戦犯たちを収容して思想改造した撫順戦犯管理所もあり、「ラストエンペラー」こと愛新覚羅溥儀もここの囚人でした。

満州国最大の港町だった大連では、一転して明るい光景を目にしました。大正デモクラシー時代を反映した、明るく垢ぬけて洗練された洋風の建物が高級住宅地の南山山

麓一帯に建ち並び、また、町の中央の中山広場は、満州時代のホテルや銀行などが整然と円を描いて広場を取り囲んでいます。星海公園という浜辺は、満州時代には「星が浦」とよばれた海水浴場で、まるで日本の昭和の海水浴場のような面影を残しています。

そして私にとって満州で最も印象深い都市で、その後も何度か訪問した都市というと、やはり長春です。はてしない荒野を首都とし、「新京」と名付けた長春という町こそ、私にとって満州国そのものです。長春駅を下りると、まっすぐな広い道路が南下します。この道の両側を見ると、当時の建物が所々見られます。また、旧関東軍の司令部などは、建物の上に城郭のような屋根がついているユニークな建物ですし、旧満州中央銀行などは巨大な大理石の、この上なく豪華で優雅な建物です。地元で「地質宮」と呼ばれる満州国皇帝の宮殿になるはずだった建物にしても、中華風の素晴らしい建築ですし、そこから南に走る新民大街は、東京で言うと霞が関のような官庁街で、アジア風の屋根をのせた建物がずらりと並びます。そしてそれらは伝統的な日本のものでも中国のものでも、ましてや西洋のものでもない、1930年代の満州ならではの「帝冠様式」というスタイルです。

これでもかこれでもかという勢いでこの建築群は違和感とともに私の中に入り込んできます。

↑旧満州国国務院（長春市現白求恩医大）
満州国という国は、日本人からすると政治的、経済的、そして文化的にも行き詰った日本から解放されるべき場所でしたが、その土地は全て中国人たちから二束三文で買いたいたものでした。浜口雄幸首相が右翼に暗殺されて以来、すでに軍靴によって踏みにじられつつあった大正デモクラシーの残り香が、日本の本土から満州のあちこちに移植されました。植民地主義という極めて非民主的なやり方の上に、大正デモクラシーという萌芽期の民主主義的な、大衆文化を実験的に植え付けようとしたのが、今残るこれら満州の「遺跡」なのです。
日本から来た私に対するリップサービスかもしれませんが、今なお現地の人が当時の建築をさして「やはり日本人の造った建築はしっかりしている。」などというたびに、言いようのない居心地の悪さを感じます。ひいては日本人が作った満州の町を歩くときに感じる違和感や居心地の悪さは、おそらく明るく自由な大正の時代精神が、侵略と占領を下敷きにしてなりたっていることに直面せざるを得ないからではないでしょうか。中国人から「しっかりしている。」といわれても、右翼がかつた日本人が「満州国建国は侵略ではない」というのを聞いても、「昔は日本人の下に朝鮮人が来て、その下に中国人だったのに満州国がなくなってから朝鮮人が下になった」などと朝鮮族の老人から言われるのを聞いても、いずれも居心地が悪いことこの上ありません。あらゆる相矛盾する形容詞が、この国に対

して雑多に不均等に用いられるのも、つまるところはあの国が建国時から矛盾に矛盾を重ねた産物だったからに異なりません。

20世紀の東京散歩

①江戸東京博物館

両国にある江戸東京博物館は通訳案内士試験受験者によって必見です。ここの5階には大正時代の浅草の繁栄ぶりと、関東大震災後の様子、そして戦時中の家の様子や空襲の様子、戦後の復興などについて実物や模型を見ながら学べます。可能ならば高齢者のボランティアガイドに頼んで話をしてもらおうと実体験からきた戦争体験が聞けるかもしれません。

②江戸東京たてもの園

小金井市にあるこのたてもの園には、その名の通り江戸時代から昭和までの様々な建物が軒を連ねます。このなかに高橋是清邸が移築されているのですが、二二六事件はここで起こったのだと実感できること請け合いです。そのほかにも大正時代のモダンな別荘も数棟移築されていますので、当時の雰囲気を楽しんでください。ここもボランティアガイドに説明していただけますので、事前にご確認ください。

③昭和館

1930年代から40年代にかけての庶民の暮らしが最もよく分かる場所の一つが、九段下駅からごく近いところにある昭和館です。ここは当時のものがそのまま展示されており、また当時のラジオ放送や音楽などもかかっている臨場感あふれます。各コーナーで説明のビデオを見てから展示物を見るのがお勧めです。

④遊就館

ある意味、中国人や韓国人にとって日本でもっとも有名な神社の一つが靖国神社ですが、その奥にある資料館が遊就館です。ご存知の通り、日本の博物館にしては珍しく政治的主張を強くしてきます。好き嫌いは別として、このような考えがあるということで見聞の価値はあります。8月15日に行くと、「右翼コスプレ祭？」とでもいふべき軍装をしたおじさんたちがたくさん見かけられます。

⑤市ヶ谷記念館・池袋サンシャイン

戦勝国が敗戦国を裁判形式で裁くという中立とは程遠いと批判を受ける東京裁判ですが、それが行われた建物が、市ヶ谷の防衛省内に部分的に復元されています。東条英機が座った位置など、案内の方が詳しく説明して下さいます。自衛隊の生活を垣間見るのも興味深いところです。なお、池袋サンシャインの下に東池袋中央公園があります。ここは東京裁判で戦犯とされた東条英機らがいた巣鴨プリズンの跡地でもあります。